

中国産陶磁器の墨書銘の 所謂「花押」に関する一考察

劉 海 宇[※]

はじめに

墨書のある中国産陶磁器は博多を中心に大量に出土している。佐藤一郎氏によれば、墨書陶磁器の年代は11世紀後半から13世紀中頃にまたがり、A期からC期まで時期が区分できるという（佐藤1996）。その墨書内容のうち、佐伯弘次氏の分類により、「中国人姓（名）+花押」または「数字+花押」という種類は存在するとされている（佐伯1996）。この花押説は多くの学者に継承されており、今日では一定の通説のようになっている。一方、少数ではあるが、中国の一部の研究者間では、これらの所謂「花押」は本当の花押ではなく、ある種の記号であると解釈されている（張1998、黄2007）。

博多出土中国陶磁器の墨書銘の資料集成は現在に至るまで、2回に分けて行なわれており、その1つは博多研究会『博多遺跡群出土墨書資料集成』であり（博多研究会1996）、次が大庭康時氏の「墨書陶磁器をめぐる最近の状況」である（大庭2003）。本稿では、前者を資料ア、後者を資料イと称することにする。また中国福州市内の遺跡からも宋代墨書陶磁器が出土しており、張勇氏によって学会に報告されている（張1998）。さらに近年は、韓国泰安郡馬島海域からも同時代の墨書陶磁器が報告されている（韓国国立海洋文化財研究所2013）。ここでは、福州市内の墨書陶磁器を資料ウ、韓国馬島のもを資料エと略称する。そこで、本稿では、資料アと資料イにおける所謂「花押」銘を中心に、「花押」とされてきた墨書銘を適宜分類して資料ウと資料エなどのほかの墨書銘と比較することにより、所謂「花押」の分類とその解釈について検討していくことにしたい。

陶磁器墨書「花押」の研究史

博多出土の中国産陶磁器の墨書銘の中には、たまたま読めない記号か草書体の文字が混ざっており、このたぐいのもを花押とされている。佐伯弘次氏は墨書の種類を人名・数字・仮名・花押らしきものと用途などに分類している（佐伯1988）。同氏は、のちに墨書の花押に「中国人姓（名）+花押」・「数字+花押」・「花押のみを書いたもの」などとさらに詳しく分類している（佐伯1996）。大庭康時氏は、陶磁器の墨書の中国姓や花押は荷主の識別記号だと述べている（大庭1999）。

一方で、張勇氏は「」のような記号を「直」の草書体とし、「置」の仮借字と読むべく、「購

※ 岩手大学平泉文化研究センター





























置] (買い入れる) の意味としている (張1998)。黄建秋氏は、資料ア719「置」や98「置」(表4)などの記号を「直」の草書体や変体字とし、「購置」の「置」の意味だと述べている(黄2007)。

田中克子氏は、張勇氏の指摘した「置」字説を踏まえながら、「いずれにしてもその筆跡により本人であることが識別できることからこれも花押(サイン)と同じ意味である」と述べ(田中2013)、花押説と記号説を調停する見解を示している。

所謂「花押」の分類

所謂「花押」を検討する前に、まずそれを適切に分類することが不可欠である。分類の基準はその書き方の近似性によるほかないと思われる。この字形の近似性という基準に基づき、次のようにA類からF類まで6種類(表1~表6)に分けることができる。

表1 「花押」A類¹⁾

番号	模写	出典	番号	模写	出典	番号	模写	出典
1		資料ア 55	11		資料ア 930	21		資料イ 645
2		資料ア 190	12		資料ア 949	22		資料イ 729
3		資料ア 256	13		資料ア 1134	23		資料イ 770
4		資料ア 334	14		資料イ 214	24		資料イ 790
5		資料ア 351	15		資料イ 286	25		資料イ 842
6		資料ア 475	16		資料イ 288	26		資料イ 854
7		資料ア 572	17		資料イ 299	27		資料ウ 3
8		資料ア 578	18		資料イ 356	28		資料ウ 68
9		資料ア 669	19		資料イ 452	29		
10		資料ア 915	20		資料イ 463	30		

1) 前述したように、出典資料は、資料ア：『博多遺跡群出土墨書資料集成』(博多研究会 1996)、資料イ：『墨書陶磁器をめぐる最近の状況』(大庭 2003)、資料ウ：『福州地区発現的宋元墨書』(張

勇 1998)、資料エ：『泰安馬島出水中国陶磁器』(韓国国立海洋文化財研究所 2013)である。

表2 「花押」 B類

番号	模写	出典	番号	模写	出典	番号	模写	出典
1		資料ア 224	8		資料イ 62	15		資料イ 665
2		資料ア 1054	9		資料イ 109	16		資料イ 772
3		資料ア 1056	10		資料イ 174	17		資料イ 844
4		資料ア 1057	11		資料イ 290	18		資料イ 865
5		資料ア 1058	12		資料イ 415	19		資料ウ 64
6		資料ア 1069	13		資料イ 418	20		資料ウ 65
7		資料イ 35	14		資料イ 560	21		資料エ 1981

表3 「花押」 C類

番号	模写	出典	番号	模写	出典	番号	模写	出典
1		資料ア 175	6		資料イ 428	11		資料ウ 21
2		資料ア 177	7		資料ウ 6	12		資料ウ 22
3		資料ア 240	8		資料ウ 8	13		資料エ 1880
4		資料ア 1165	9		資料ウ 13	14		資料エ 1900
5		資料イ 357	10		資料ウ 23	15		資料エ 1955

表4 「花押」 D類

番号	模写	出典	番号	模写	出典	番号	模写	出典
1		資料ア 98	7		資料ア 122	13		資料ア 133
2		資料ア 111	8		資料ア 123	14		資料ア 134
3		資料ア 113	9		資料ア 127	15		資料ア 640

4		資料ア 115	10		資料ア 128	16		資料ア 795
5		資料ア 116	11		資料ア 131			
6		資料ア 119	12		資料ア 132			

表5 「花押」 E類

番号	模写	出典	番号	模写	出典
1		資料ア 67	6		資料イ 317
2		資料ア 331	7		資料イ 318
3		資料ア 952	8		資料イ 319
4		資料イ 313	9		資料イ 626
5		資料イ 316	10		資料エ 1881

表6 「花押」 F類

番号	模写	出典
1		資料ア 791
2		資料ア 792
3		資料ア 793
4		資料ア 1121
5		資料イ 206
6		資料ウ 67

確かに「花押」なのか

さて、花押の定義について、『国史大辞典』では「自署の代わりに書く記号」とされており、佐藤進一氏は、「花押は自署の代わりに用いられる記号もしくは符号であって、その起源は自署の草書体

にある」と定義している（佐藤1988）。『漢語大詞典』によると、「舊時文書契約末尾的草書籤名或代替簽名的特種符號（旧時に文書・契約の末尾の草書籤名あるいは籤名を代替する特種の符号）」ということである。以上から分かるように、花押は他人がまねできない本人独自のサインのことで、自署本人と他人を区別するためのものである。つまり、花押は自署者本人であることを証明するもので、独自性・唯一性を持つのがその特徴である。それでは、陶磁器墨書の所謂「花押」はといった独自性・唯一性を持っていると認められているのだろうか。

まず、表1の所謂「花押」A類を検討してみよう。掲出した実例を見ると、1-1の陳四+A・1-3と1-14と1-17の九+A・1-5の銭+A・1-6の余+Aがあり、このためA記号は明確に独自性・唯一性を持っていないといえる。すなわちAは花押ではないことが明らかである。

次に、所謂「花押」B類を見てみよう。表2の実例では、2-1と2-16と2-17の陳+B・2-2の黄+B・2-6の呉+B・2-10の李+B・2-12と2-14の莊+B・2-8と2-11と2-18の戴+B等があるため、このB類記号も花押とすることはできない。

また、表3の所謂「花押」C類では、3-1と3-2と3-3の衣+C・3-6の毛+C・3-7の林+C・3-8の劉+C・3-9と3-13と3-15の朱+C・3-10の黄+C・3-11の周+C・3-12の陳+C等があるため、C類も明らかに花押とみることはできない。

一方、表4のD類記号は一字記号のほかには朱+Dのみ、表5のE類記号は林+Eのみ、表6のF類記号は一字記号のみである。本稿の対象とする資料ア～エから見ると、これらの記号は独自性・唯一性を持つ花押のように見えるが、しかし南海一号沈没船と華光礁一号沈没船から引き上げられた陶磁器と同じたぐいの墨書銘記号があることは否定できないため、D類・E類・F類記号が花押であるかどうかの判断は早計に行うことはできない。これらの記号についての検討は、南海一号と華光礁一号などの新資料が公表された後に行ないたい。

次の節では、明らかに花押ではない記号A類・B類・C類を対象に、ほかの墨書銘と比較しながら、新たな解釈を試みたい。

所謂「花押」の解説

宋代人の肉筆の書札を見ると、とりわけ注意すべきことがあり、それは誰でも知っている常用の言葉を書札化する傾向である。例えば、宋の書道四大家の一人と称される米芾はその書札の落款に「頓首」を多彩に記し、高度な記号化とする場合も多々ある（『中国書法全集』37米芾一と38米芾二所収、表7）。同じ道理で類推すれば、陶磁器墨書のA類記号も当時の人々が誰でも知っている常用の字である可能性が高いと考えられる。

表7 北宋時代米芾肉筆の「頓首」二字の書き方

番号	模写	出典	番号	模写	出典	番号	模写	出典
1		米芾 「乱道帖」	6		米芾 「留簡帖」	11		米芾 「伯充帖」
2		米芾 「雨寒帖」	7		米芾 「方回帖」	12		米芾 「糖霜帖」

3		米芾 「篋中帖」	8		米芾 「指諭帖」	13		米芾 「広帥帖」
4		米芾 「歳豊帖」	9		米芾 「臘白帖」	14		米芾 「臨顧帖」

表1のA類記号は「綱」字の草書体であろう。博多出土中国産陶磁器の墨書銘に「綱」字の書き方は実に多様多彩である。その代表例を表8のように示す。

表8 博多出土中国産陶磁器の墨書銘「綱」の字形

番号	模写	出典	番号	模写	出典	番号	模写	出典
1		資料ア 82	6		資料ア 896	11		資料イ 534
2		資料ア 295	7		資料ア 279	12		資料イ 155
3		資料ア 299	8		資料ア 302	13		資料イ 160
4		資料ア 289	9		資料ア 686	14		資料イ 85
5		資料ア 292	10		資料ア 1049	15		資料イ 325

表1の3・14・17・21・23番などのAの書き方は明らかに表8の7・8番の「綱」の書き方と近い。おそらく表1のA類記号は「綱」字の草書体の一つであろう。ことばの意味から考えても、表1の14・17・26番の九Aと24番の六AのAが「綱」と読むことは墨書銘の頻出する「数字+綱」と一致することになる。

表2の所謂「花押」B類をA類と比べると、B類の下部にただ筆画の横画が書かれて、横画の上の部分A類とほぼ同じである。例えば、表2の10・16番などのBの書き方と表1の10・20番のAの書き方との区別は下部の横画だけであろう。この横画はおそらく省略がある証として「綱」の草書体に盛り込まれたと考えられる。

表3の所謂「花押」C類は明らかにB類書き方のさらなる省略体であろう。B類の曲線を直線にした書き方となる。一つの漢字の草書体は数種類ないし十数種類になる場合が多々ある。つまり、「綱」字の書き方は陶磁器の墨書銘で数種類になることがありうる。その省略変化の過程はA→B→Cの方向へ変わっていくと推察される。

おわりに

以上の検討をふまえたうえで、中国産陶磁器の墨書銘の所謂「花押」について、以下のように整理

できる。

所謂「花押」の書き方の近似性という基準に基づき、A類からF類まで6種類に分けることができる。A類・B類・C類の記号は明確に独自性・唯一性を持っていないため、花押ではないことが明らかである。

博多出土中国産陶磁器の墨書銘に「綱」字の書き方と比べたうえで、A類記号は「綱」字の草書体である可能性が極めて高いと言ってよい。また、B類とC類記号も「綱」字の草書体である可能性が否定できないと考えられる。

なお墨書銘資料が十分といえない現状では、D類・E類・F類記号についての解釈は、今後の新資料の蓄積をまって検討を加えたい。

付記：本稿は、岩手大学平泉文化研究センターが主催した「東アジア社会における日本経塚信仰の成立と展開をめぐって」研究会（2014年12月7日、東北大学）において筆者が口頭発表した「経筒・陶磁器等の墨書銘から見た宋代の貿易制度」の一部です。なお、本稿をまとめるにあたり、福建省文物考古研究所羊澤林副所長・出光美術館徳留大輔先生・岩手大学平泉文化研究センター伊藤博幸教授に多くの有益なご指導を賜りました。ここに感謝申し上げます。

引用文献

- 佐伯弘次「陶磁器に記された文字」、川添昭二編『よみがえる中世（1）東アジアの国際都市博多』、平凡社1988年。
佐藤進一『花押を読む』、平凡社1988年。
劉正成主編『中国書法全集』第37巻・第38巻、榮宝齋出版1992年。
博多研究会編集『博多遺跡群出土墨書資料集成』、青雲印刷1996年8月。
佐藤一郎「輸入陶磁器の分類」、『博多遺跡群出土墨書資料集成』1996年8月。
佐伯弘次「博多出土墨書陶磁器をめぐる諸問題」、『博多遺跡群出土墨書資料集成』1996年8月。
張勇「福州地区発現的宋元墨書」、『福建文博』1998年1期。
大庭康時「集散地遺跡としての博多」、『日本史研究』448号、1999年。
大庭康時「墨書陶磁器をめぐる最近の状況」、『博多研究誌』11号、2003年。
黄建秋「福岡市博多遺跡群出土宋代陶磁器墨書研究」、『学海』2007年4期。
大庭康時「墨書陶磁器」、『中世都市博多を掘る』、海鳥社2008年。
広東省文物考古研究所『2011年南海一号的考古試掘』、科学出版社2011年。
国立海洋文化財研究所『泰安馬島出水中国陶磁器』、ウォンイル印刷2013年。
田中克子「韓国泰安馬島海域出土中国陶磁器から見た東アジア海域海上貿易の一樣相—博多遺跡群出土の中国陶磁器との比較を通して—」、国立海洋文化財研究所『泰安馬島出水中国陶磁器』2013年。